**佐藤　愛子 （さとう・あいこ）**

**１、プロフィール**

「戦いすんで日が暮れて」が直木賞受賞作。いわゆる女性作家とは異質な太い線を持ち、あけっぴろげな庶民性に支えられた作品が多く、独自な風格を示している。

＜生没＞

1923（大正12）年11月５日 ～

＜代表作＞

『愛子』『ソクラテスの妻』『加納大尉夫人』『花はくれない－小説佐藤紅緑』『こんなふうに死にたい』『血脈』

＜青森との関わり＞

作家佐藤紅緑（弘前の人）の娘。詩人のサトウ・ハチローは異母兄。

**２、作家解説**

父佐藤紅緑、後妻シナとの間に次女として大阪に生まれる。異母兄４人の長兄が詩人サトウ・ハチロー。甲南高女(神戸)卒業。昭和25年「文芸首都」同人となる。「冬館」(「文学界」昭和34年９月 ）を発表、山本健吉に文芸時評で、美和子・元子・蕗子という娘たちの「軽井沢版『三人姉妹』」であると評されて文壇に登場。

代表作に『ソクラテスの妻』(第49回＜昭和38年上半期＞芥川賞候補)『加納大尉夫人』(第52回＜39年下半期＞直木賞候補)『戦いすんで日が暮れて』(第61回＜44年上半期＞直木賞受賞)『女優万里子』『幸福の絵』(第18回＜54年＞女流文学賞受賞)。他に『赤い夕日に照らされて』『ああ戦いの最中に』『黄昏の七つボタン』など“ドライなユーモアと塩からいペーソス”の入りまじった軽快なタッチの「猛妻もの」でその本領を発揮した。

また初期の自伝的小説『愛子』、父紅緑の伝記『花はくれない－小説佐藤紅緑』、その底に中年女性のわびしさが感じられる『その時がきた』『鎮魂歌』『こんなふうに死にたい』（第８回日本文芸大賞・昭和63年）等がある。加えて、軽妙でユニークなエッセイも多い。

**３、資料紹介**

〇『戦いすんで日が暮れて』

図書

1974（昭和49）年11月30日

150mm×115mm

この創作集には冒頭の直木賞作品「戦いすんで日が暮れて」を含めて８短編を収録。松本清張はその選評で「近ごろ珍しいドライなユーモアで塩からいペーソスがある。これが作者の技巧でなく体質から出ているところに信頼がもてる」と高い評価をしている。